

保育園における乳幼児に対する運動指導の一考察

A study of the exercise instruction for the infants in the nursery school

1K08B131-4 釣見あずさ

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 前橋 明先生

【序 章】

<研究の目的>

私は卒業後の進路を保育従事者と高校卒業時から決めていたため、大学入学後から保育士資格取得の勉強を始め、同時に保育園でのアルバイトを2年ほど経験した。

その2年間で保育の現状を知り、保育園はそこに通う乳幼児にとって生活の中心となっていることを実感した。多くの乳幼児は日中のほとんどの時間を保育園で過ごし、親と過ごす時間と同じくらいの時間、もしくはそれよりも多くの時間を保育士や保育園に通う他の乳幼児と過ごすことになる。保育園は家庭と同じように、気を休めることのできる場所でなくてはならないし、保育士は親と同じように乳幼児を愛し、安心感を与えることのできる存在でなければならない。保育士は誰よりも近くで乳幼児を見ているのだから、その成長をしっかりと把握し、適切なかわり方をしなくてはならない。それは身体の発達や運動の形成についても同様である。

上記のような経験を踏まえて、乳幼児にとって、1日のほとんどを過ごす保育園における運動が乳幼児の成長に大きな影響を与えるのではないかと考えた。そこで本研究では、保育園で取り組むべき運動指導のあり方について検討することを目的とする。

<研究の方法>

本研究は、乳幼児を中心とした保育園における運動指導に関する資料をもとに文献研究を進めていく。具体的には、第1章では保育の歴史について、第2章では保育の役割について検討し、第3章で「親子ふれあい体操」について提案する。

【第1章】保育の歴史

第1章では、子ども観の変遷から保育の歴史について検討した。時代の変化とともに、子どもに対する考え方が変化していき、教育のあり方や保育方法も変わっていった。そのような歴史的な変化に対して多大な影響を与えたフレーベルやモンテッソーリの教育思想は今日の保育指導でも受け継がれていることがわかった。

【第2章】保育所の役割

子どもを保育園に預ける親は、仕事などを含めて何らかの事情によって日中は子どもと過ごすことができない。保育園という場はそのような保護者の手助けをし、保育士は保護者

と離れている時間、その代わりとなる。従って保育士は、子どもと1対1で向き合い、一緒に遊ぶ時間も必要である。そのため、子どもに対する保育士の数が多いほど、適切な運動指導が行えることになる。保育士の数が潤沢であることで、可能になることはとても多い。子どもは何かができるようになったとき、何か作品を作ったとき、一番に見せたいのは自分の親である。「親に褒められたい」、「喜んでもらいたい」という気持ちを強く持っている。親としても、もちろん子どもの成長が楽しみであり、できることなら近くで見たいと思うものである。しかし、仕事で忙しかったり、何らかの事情があって子どもを保育園へ預けている。その子どもと離れている時間を埋めるために、保育園であった出来事をするだけ多く親に伝えたり、見せてあげたりするのが理想的保育園である。例えば、子どもたちの作品はどんなに些細なものであっても必ず家に持ち帰れるように管理する。折り紙を丸めてだけであっても、紙に線が一本引かれているだけでも、それは立派な作品であるし、親はそれを見て子どもの成長を実感する。子どもは自分の作った作品を親が嬉しそうに見ている姿に大きな喜びを感じる。これと同じように、新しく覚えた運動も子どもたちが家に持ち帰り、親とそれを共有できたら良いのではないだろうかと考える。

【第3章】親子ふれあい体操のすすめ

保育園では狭いスペースを有効活用し、また親子が離れている時間を埋められるように自宅でも実践でき、子どもの成長を親が感じ取れるものがよい。そこで、私は保育園での運動として「親子ふれあい体操」を進めたいと考える。「親子ふれあい体操」とは、大人と子どもが1対1で、何も道具を使わずに体を使って行う簡単な運動である。

【結 章】

保育園で適切な運動指導ができることによって、家庭での親子の触れ合いの時間が増えたり、家庭でも親子で運動を楽しむことができるようになる。それには、保育士の知識が必要不可欠である。そこで日本体育協会の主催している幼児体育指導者検定の受験をすすめる。ここでは、子どもの発達について、また実技指導では子どもに運動を指導する際の適切な手順やサポート方法などが学べる。これによって、幼児体育の知識をしっかりと持った保育士が増えたらよいと考える。

